

土塔の弁天・土塔塚

むかし、むかし、平安時代の初めの頃、弘法大師が、二荒山へ向かう途中、川辺の里に泊まつたと。その夜、夢の中に弁天様が現れて、
「我は、百々塚権現の近くの池に住む白蛇である。
池のほとりに、弁財天をまつるがよい。どんな日照りにも豊かな水を与えよう。
誓いのしるしに、片葉のヨシを茂らしておこう。」
と告げたと。

あくる日、弘法大師は、百々塚の里を訪ねたと。
そこに、片葉のヨシが生えている広い池があつた。
錫杖の石突きで、池の水をかき回すと、白蛇がうねうねと動くのが見えたと。
昨夜の夢は、正夢だった。
そこで、弘法大師は、村の人たちにすすめて、弁財天をまつらせたと。

この日、弘法大師は、百々塚権現の社にこもって、五穀豊穣を祈願した。
その時、次のような歌をよんだと。

みたらしのなきけにもどれ人ごころ
神のうけひく民ぞ栄えん

池には、おびただしい数の羽虫の群れが、竜巻のように、渦巻き立っていたと。
村の人たちは、口々に、
「羽虫が沢山わいて、作物を荒らすので困ります。どうか、助けて下さい。」
と弘法大師にお願いしたと。

そこで、弘法大師は、村の人たちに、
「池を汚すから羽虫もわく。まず池を綺麗にせよ。」
と命じたと。

村の人たちがゴミを拾い集め、池の水が澄んだ時、大師は、錫杖を鳴らして祈った。
すると、一団の羽虫が雲のように飛び去つたと。
村の人たちが、その後を追うと、羽虫が山のように積み重なって死んでいた。

それを見て、弘法大師は、
「この上に、塚を築け。」
と言つたと。村人たちは、一日かけて、もっこを百杯運んだ。
すると、弘法大師の法力で、一日一夜で大きな塚が出来たと。

もっこ百杯の塚だから、十かける十で、十十塚と呼んだ。
それが訛つて、土塔塚になったと。

おしまい。